

## 言語の三角形—記号としての言語の構造

レヴィ=ストロースの構造主義に多大な影響を与えたヤコブソンの音韻論（プラハ学派）は、世界中の言語音声は 12 対の音素の組み合わせで構成されているという「記号としての言語」論である。この中で言語音声と言語の指し示す意味の間には、何の法則性もなく自由、もしくは「恣意」であり、言語音声は物理音でありながら、その聞き分けられ方は、各言語集団の取り決め、「一種の文化（もしくは社会制度）」であるという。

20 世紀の夜明けを迎えて、近代科学的思考の興隆の真ただ中で、世界の秩序は、動かざる自然、それに対峙してその自然科学的法則性や秩序を理性的に知る事ができる近代的自我、近代的理性の働き、その展開こそが近代科学であり、それを表現するところの言語であった。この様な世界観において、言語音声の物理音的特徴と指し示す意味の関係、そして各言語の歴史的な伝播その展開の科学的解明が、当時の言語論の中心的なテーマであった。

この時代の真ただ中で、言語音声の物理的特徴と指し示す「意味」との間には、何の必然的關係は無く、全くの自由「恣意」であり、いわば無意識からの指定があるのみと言う、記号としての言語論、その構造がソシュールによって提示された。

### 1. ソシュールとプラハ言語学派による音韻論

ソシュールの言語理解に基づいて、言語音声の中に音素を見出し、その構造を示したのが 20 世紀初頭のプラハ言語学派、ヤコブソンである。レヴィ=ストロースとヤコブソンはニューヨークの亡命知識人を受け入れる「社会研究新学院」で亡命者同士として出会い、互いの講義を聴講しあったと言う仲だが、後にその時の講義をまとめたヤコブソンの『音と意味についての 6 章』の、有名な序文を書いたのがレヴィ=ストロースである。

言語音声は、「音素」と言う音の単位、日本語をローマ字表記した時の一字一字にあたるような、音を区分け、意味を識別する為の最小の音の単位で構成されており、その「音素」には、それぞれの単語の音を区別して聞きわけ、識別に役立つ対立軸、たとえば無声/有声、母音/非母音、密/疎などの対立関係があり、それを弁別特性（示差的特徴）として二項対立を考え、それら弁別特性（示差的特徴）のセット（群）として言語音声を整理して世界中の言語を捉えたのがヤコブソンである。

弁別特性（示差的特徴）であるところの「無意識の二項対立関係」、その 12 の束である世界中の言語音声は、その音の響き合いの差異をもって意味を成すのであり、言語の指し示す意味は、実体ならざる音同士の関係、差異の関係により、カオスだと言う自然、己を取り巻く外界、自然から、発語者が切り取って意味を成すのだという。「言語音声」と指し示す「意

味」の間に法則性は皆無、全くの自由「恣意」であり、無意識からの指定あるのみと言う。

このような記号としての言語、音の組み合わせ、音の差異関係によって意味をなす構造、自分を取り巻くカオスとされた外界、自然から、発語者がいわば、その時の発語者における感興を、無意識からの指定によって、音声と意味をつないで表れる構造、記号としての言語は、音の組み合わせ、響き合いの違いによって意味をなし、彩をなすが如くに展開している。

プラハ学派は、物理音としての言語音声と、意味のつながりを求めようとする、当時の主流であった自然科学的な言語理解に対して、記号としての言語の構造、その聞き取られ方、意味の生成について、言語音声と意味の間には、何の法則性もない自由、「恣意的」であり、無意識からの指定あるのみとして、各言語集団毎に響きあい、聞き取られるところの意味の世界、言語の記号論的構成を示した。

ソシュールのアイデアをなぞるが如く、「音素の発見」、「無意識の二項対立」、「言語の恣意性」が、プラハ学派、ヤコブソンらによって、言語音声の中に明らかされた訳である。

## 2. ソシュールとエピステモロジー

①フェルディナン・ド・ソシュール(Ferdinand de Saussure, 1857-1913)

ソシュールは、19世紀の後半から20世紀初頭に生きたジュネーブ生まれ(スイス)の言語学者だが、生前は一冊の著作も残さなかった。しかし1906年から1911年にかけて、ジュネーブ大学において行った一般言語学の3回にわたる講義が、その没後聴講生、弟子達によって纏められ、1916年に『一般言語学』として出版されている。

ソシュールの有名なシフィアン、シニフィーユ、言語の恣意性というアイディアも、この『一般言語学講義』の解説によるという「謎に満ちた生涯<sup>1</sup>」を生きた人である。

この『一般言語学講義』は、世界で先駆けて日本語翻訳が小林英夫によってなされ、1928年には『言語学原論』が日本で出版されている。アングロ・サクソン系ではそれから30年も遅れての翻訳本の出版<sup>2</sup>であり、「人間学、文化学一般にわたる方法論とエピステモロジーに、コペルニクス的な転回をもたらした<sup>3</sup>」というソシュールへの評価の浸透、その在り様はさまざまであった事がうかがえる。

弟子たちによる講義のまとめは、今では難点が指摘されているのだが、その『一般言語学講義』の出版から40年も過ぎて、1955年1月、1957年12月、1958年の始めに相次いで講義の「原資料」が発見され、今では新たな解釈、検討がなされている。

<sup>1</sup> 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P14 岩波セミナーブックス2 岩波書店 2009年3月

<sup>2</sup> 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P9 岩波セミナーブックス2 岩波書店 2009年3月

<sup>3</sup> 同上 P17 「

それら講義の「原資料」は第二次大戦勃発の直前に、高名な学者だった彼の曾祖父と祖父の資料の散逸を懼れた親族が、大学図書館に預けたのだが、それらを図書館側が正式に譲り受けたいとして始まった戦後復興後の整理において、幸運にもフェルディナン・ド・ソシュール自身の手稿が多く混じていたことが発見されたものである。

名門の出の天才でありながら、自身の思想は時代を覆いつくす近代科学的な認識の構図を書き換えようという未踏の思想、ソシュールは己の思想故の内面の衝撃、そして確信、あるいは「熱狂と苛立ち」でもあろうか、アナグラム研究に没頭しつつ 55 歳で病没している。

## ② エピステモロジー

エピステモロジーとは、「科学認識論」とも訳されているマックス・ウェーバーのタームだが、中世諸科学の思想や諸価値への「科学による批判」が行われたのが近代、近代西欧であるとすると、旧来の思想や諸価値への裁断の構図における、近代科学の側の「科学性」や「客観性」について、それ自体が一つのイデオロギーではないか<sup>4</sup>という視点をもって、「諸科学の方法論」、「諸科学の論理」を探ってゆく学問だという。

レヴィ＝ストロースは、『言葉と物』の中でフーコーが提示した命題<sup>5</sup>、異なったエピステマー（認識世界）相互の乖離について語るのだが、丸山圭三郎はエピステモロジーについて、近代的知性の行う「認識の構図」に対する批判、あるいは『科学的真理とは何かと言う問題 le problème de la vérité scientifique』、さらには『科学と哲学の間の諸関係の問題 le problème des rapports entre science et philosophie』を探っていく<sup>6</sup>学問であり、「諸科学の認識の構図への批判的研究」としている。

そして丸山は、ソシュールを「言語学批判を通して十九世紀的パラダイムの地殻変動を用意した思想家の一人」としており、さらに逆向きの表現によって、ソシュールの言語論は、さまざまな学問領域の枠を超えて「既成の枠自体への批判から出発する脱領域的営為としての記号学<sup>7</sup>」であり、エピステモロジーを通して始めてうまれてくるとも説明をする。

### 3. ソシュールの功績（言語名称目録観の否定）

ソシュールにおいては「読む」という行為と、「書く」という行為は切り離すことができず、「表現というものと内容は分離できない存在<sup>8</sup>」としてその言語観を展開している。この観点が「すべての表現作用、すなわち『身振る』『描く』『彫る』『歌う』『話す』『書く』と

4 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P10 岩波セミナーブックス2 岩波書店 2009年3月

5 レヴィ＝ストロース／エリボン『遠近の回想』P204 みすず書房 1991年12月25日

6 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P11 岩波セミナーブックス2 岩波書店 2009年3月

7 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P12 岩波セミナーブックス2 岩波書店 2009年3月

8 同上 P24

いう行為においては表現と内容というものは分離できない。<sup>9)</sup> という、人間の観念作用、その表現のされ方の関係、その一体性を示している。

#### ① 恣意性・記号性

ソシュールは、人間の表現作用そのものである言語、その意味の伝え方、理解のされ方は、その言語音声の物理音的な個性と指し示す「意味」との間に、何の必然的關係はなく、音声の組み合わせ方、響き合いの差異のみが意味を生じせしめるとする。

言語音声と言語の指し示す意味の間には、必然的な関係、あるいは法則性を求める事はできず、いわば恣意的（非自然的）であり、全くの自由であり、音声の組み合わせ、響きの違いだけが、意味を決定する。この言語の性質を、ソシュールは「恣意性」と表現する。

人間が言語を発する時、その指し示す意味は、その音声の響き方の違いとして、人を取り巻く外界、環境（カオス）から、発語者が切り取って初めて生成するのであり、その時、その言語音声と意味との間の、無関係性、恣意性が言語の構造の特性であるという。

このような発想では、言語で表現されるべき、人を取り巻く環境、自然などの対象世界、現前の事実などの動かざる存在が、まず否定されて、それはカオス（混沌）だとされている。そして意味と言語音声を繋ぐものは、人の意識作用を外れて恣意であり、いわば「無意識」からの指定と言うべき世界であり、言語音声の聞き取られ方、区別のされ方、意味生成のしかた、その秩序は、その社会の取り決めであり、文化内容であり、社会の制度であるという。

このような記号的な言語の構造、音声と意味との関係を、ソシュールは「恣意性（非自然性）」としている。そしてこの性質こそが、言語が記号としての構造を成している事の表現といえよう。ソシュールは記号論としての言語論を、20世紀初頭のジュネーブで展開するわけである。

#### ② 無意識の二項対立、音韻論

ソシュールが言語の構造を記号論として展開した講義は、近代科学的な各学問分野が生成、興隆へと向かう20世紀の初頭、1859年にはダーウィンの進化論が発表されている。この時代の風潮の中で、当時の言語学は、科学的に物理音としての言語音声の研究を行う音声学、そして言語の歴史的な伝播、類縁性の研究を主流とする時代であった。

その中で、ソシュールの1906年から1911年のジュネーブ大学の一般言語学講義のIの序論において、言語音声を物理音としてその違いを区別しようとする音声学は、言語学の補

---

<sup>9)</sup> 同上 P25

助的学問であると指摘<sup>10</sup>し、さらにアナロジーを言語創造の一つの契機として強調している。

「音の組み合わせ」が異なると「意味」も異なり、あるいは消えるといった、音の選ばれ方、その差異、「差異」のみが意味を決定し、言語音声の響きの違い、「差異」を選ぶ作業は、話す主体の意識のレベルを超えた、言語の「無意識のレベル」<sup>11</sup>での精神的操作を前提とする。音同士の関係、その響きの違い、その差異を際立たせる二項対立する弁別特性（示差的特徴）の組み合わせによって展開する、「差異」だけに規定される音と意味との繋がりである。

### ③ 差異の体系

そもそも「差異」とは他と比較された上での規定性であり、他との関係をもって初めて浮かび上がり、気づかれる事柄である。さらには差異がある、異なるという事は同一では非ずと言う意味で、否定的な規定性であり、かつその差異が明確に識別されるため、互いの差異を際立たせる、二項対立関係、弁別特性（示差的特徴）を要請する。ソシュールの記号論である言語論では、言語における言語音声構造へのイメージは、ここまでが予定されている。

カオスと表現された自分を取り巻く自然、その真ただ中で、自らの気付き、感興によって発せられた言語音声、それがカオス（自然、外界）から切り取られた意味の発生であり、この意味と音声の間には無意識からの指定というべき「無意識の二項対立関係」を単位とする、音素の組み立てがイメージされている。無意識からの指定があるのみ、恣意であり自由である音と意味の関係、記号としての言語の構造である。

この記号的な単位(シーニョ)の集合が、集団において使用され意味を伝えあう言語、社会の取り決め、文化内容、社会制度ともいうべき各言語へと向かうと言うイメージであろう。

ソシュールのジュネーブ大学講義 I の序論<sup>12</sup>の解釈では、記号として、差異の体系である言語の構造、「言語は無意識からなる差異のみの体系」であると言う観念は、1906年に開始されたジュネーブ大学の一般言語学講義以前、既に 1894年頃には完成させていた<sup>13</sup>とされる。フロイドの『夢判断』、無意識の提示は 1900年である。

21世紀の今日、私達は ON と OFF という一対の差異関係のみで構成するコンピューター言語が、大衆的に使用される時代を迎えて、記号としてのコンピューター言語における概念や意味の生成に接し、それを日常的に使用する中で、ソシュールの言語論に遭遇している。

---

<sup>10</sup> 同上 P63

<sup>11</sup> 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P70 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

<sup>12</sup> 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P72 岩波セミナーブックス2 岩波書店 2009年3月

<sup>13</sup> 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P15 岩波セミナーブックス2 岩波書店 2009年3月

#### ④ 言語名称目録観の否定

聖書においては、神の創造物たる森羅万象であり、その中に神の形に似せてアダムとイブが土をもってつくられ、神によって魂を授けられた。「神に造られたこの宇宙、神に作られたこの宇宙ないしは自然というものは『第二の聖書』だった<sup>14</sup>」とも言われている。

この下で中世のスコラ学、神学は完成をみるのだが、それに対峙する西欧近代もまた、合理的探究（科学的探究）の基盤をつくったガリレイ（地動説）、ニュートン（万有引力）が活躍した17世紀、そして近代哲学の祖、ルネ・デカルト（1589-1650）は「われ思う、ゆえに我あり」として、考える主体としての自己（精神）とその存在を定式化する。

しかしながら、この命題こそが、神の合理的な存在証明としての、神が作り給うた「人」の営みである「近代的理性」、これが明らかにするもの、それこそを真実とする論理ともいえよう。そうであれば、コギトの哲学が、いわば逆説的に確認しているのが、動かざる絶対的真理の实在だったのではないだろうか。

神の作り給うた自然、もう一つのバイブルとしての宇宙を読み解くという営為、自然の調和を読み解き愛でる学問として、中世世界において胚胎したという自然科学は、ケプラーが太陽系惑星の楕円運動の数学的秩序を発見して「もろもろの天は人間を取り巻く外界は、神が作り給うた完成され静止的な実体」とのべるように、自然と神羅万象、宇宙のありようを、神の造り給うた秩序ある実体として愛でているのであった。

神の造りたもうた自然の調和を読み解く側の人間の営みは、近代的な理性として展開し、その表現、意味を伝える言語作用とは、「客観的な世界の秩序や事象が先にあってその事物・現象に対して名前（名辞・記号）が与えられる」とする「言語名称目録観」としてイメージされるより他はなかったと考えられよう。

このようなアプリアリに存在する、厳然たる事実としての自然、それらを理性的に知る事ができるという人間の理性、それを記すところの言語といった、これら近代西欧的な認識構図に対して、言語は「無意識の二項対立」の構造であり、言語音声相互の差異、言語音の響き合いの差異、他の言語音声との響き合いの違い、相関関係によってのみ意味を生じ、記号的に意味を伝えあう構造体として、ソシュールの言語論は展開するのである。

ソシュールの言語観は、神学的世界観、そして近代的な認識の構図への根底的な否定、アンチテーゼであったと言えよう。

言語を記号（シーニョ）として理解するソシュールの言語論の提示した意味内容の衝撃、それは、動かざる対象であるべき、近代的自我が把握すべき対象世界（自然）は「カオス」

<sup>14</sup> 渡辺正雄『科学者とキリスト』P26 講談社 1991年6月10日

であり、近代的自我の及ばざる「無意識」のはたらきこそが、言語の意味生成におけるすべての役割を演じていると言う、エピストモロジーそのものに違いない。

### 3. 音韻論の果たした役割

#### ① 音韻論の新しさ

19世紀西欧社会には、1826年のマルサスの『人口論』、やがて1859年ダーウィンの『種の起源』が出版され、この影響下で歴史主義、伝播主義的なラング（言語、各国語）の検討が興隆する中で、1916年のソシュールの『一般言語学講義』は、「無意識のうちにはたらく、差異のみからなる体系」としての言語、その構造、言語論を展開したわけである。

その死後15年、『一般言語学講義』から12年、1928年ハーグにて第1回国際原学者介護が開かれ、ここでヤコブソン、カルツェフスキー、トルベツコイの三人が「プロポジション22」という提案をして、この時に初めて新しい意味での音韻論が誕生した<sup>15</sup>と言う。この人々はプラハ学派と呼ばれる。

なにが新しいのかといえ、それは研究の対象が物理音としての言語音声ではなく、その言語を話す集団において、音声はどのように聞き取られて意味を成しているのか、その構造を研究する学問としての音韻学である。自然科学的に物理音としての音声の違いを区別しようとする音声学に対して、言語の音声を識別するその社会の取り決め、文化内容、社会の制度としての言語研究の学問である。そこには社会科学と自然科学という程の隔たりが存在する。

#### ② シーニョとランゲージュ

言語の構造を捉えるにあたってソシュールが用いた術語は3つあり、一つはランゲージュであり、ふつうは「言語能力」また「言語活動」と訳されるが、いわばシンボル化能力の謂<sup>16</sup>と丸山はいう。二つ目のラングは「言語」と訳され、国語体としての音韻、形態、統辞、意味の体系であり、制度と言うべき、構成された社会性を有しており、歴史的な経過を背負って変化をしている。三つめのバロールは個人がラングと言うコードをもって他者に呼びかける具体的なメッセージ、その発語行為を含んでいる<sup>17</sup>。

ソシュールは、ランゲージュという人間のシンボル化能力、その表現形態の一つである言語の「構成のされかた」について、音の差異によって浮かび上がる意味生成の単位としてのシーニョ（記号）を提示する。ランゲージュとは「記号(シーニョ)をつくり出し使用する能

---

<sup>15</sup> 同上 P68

<sup>16</sup> 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P276 岩波セミナーブックス2 岩波書店2009年3月

<sup>17</sup> 同上 P277

力とそれによって実現される活動を指す。能力と活動には、発声、調音など言語の運用に直接関係するもの、抽象やカテゴリー化といった論理的なものも含まれる<sup>18</sup>。」とされている。

ここに言語音声の差異によって識別される、言語の記号としての単位、「シーニョ」が提示され、「シーニョ」が網の目のように敷かれている、ひとつの社会制度と表現された言語の構造が提示される。

シーニョは、意味（シニフィエ）と音（シニフィアン）との自由な組み合わせ、「恣意性」をもって構成され、この組み合わせを指定するのが「無意識」と言うべき人間の意識せざる観念作用、あるいは象徴機能であろう。

### ③ 音素の発見

言語音声の構造として「無意識の二項対立」という、ソシュールの観念の具現化するにうってつけの体系である音声言語の単位、「音素」を見出したのがトルベツコイである。前述プラハ言語学派、音韻論は、音素の発見により誕生したと言われる。

音韻論における音素とは音を区分け意味を識別する為の最小の音の単位だが、言語音声の単位の発見は、ソシュールの言語論の記号的に意味を生成するという構造を、そのままなぞっていたと言えよう。

### ④ 弁別特性(示差的特徴)

音素とは、それぞれの単語の音を区別して聞きわけ、識別に役立つ対立軸、たとえば無声/有声、母音/非母音、密/疎などの対立関係があり、それを弁別特性（示差的特徴）としての二項対立を考え、この弁別特性（示差的特徴）のセット（群）として言語音声を整理し、ついに世界中の言語を12ビットの弁別特性（示差的特徴）の束であると捉えたのがヤコブソンである。

レヴィストロースは、「無意識の二項対立」の関係を言語音声の内に見出したヤコブソンの表現を引いて、その「言語学と人類学における構造分析」の中で、音韻論の四つの基本的な方法論として、「①意識的な現象の研究から無意識のレベルの研究への移行、②分析の基盤を独立した実態としての項から、項と項の関係に移した事、③体系の概念の導入、④一般的な法則の発見という目的の設定」と纏めている<sup>19</sup>と言う。

そしてヤコブソンの講義録、『音と意味についての6章』の序文の中で「ソシュールの偉

<sup>18</sup> [http://b.hatena.ne.jp/entry/268332187/comment/suna\\_zu](http://b.hatena.ne.jp/entry/268332187/comment/suna_zu) 2016/06/30

<sup>19</sup> 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P69 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月



大な功績は、(・・・)ある外在的データが無意識のうちに存在しているということを正確に理解した点にある」と言うヤコブソンの言葉を示し、彼の講義の意味を「言語活動の(だがまた、あらゆる象徴体系の)産出において精神の無意識的活動が負う役割を強調する事によって、人間諸科学に多大な貢献をもたらすことは疑いえないであろう。」ともいう。

#### ⑤ 言語の構造

ソシュールは、まずラング・バロールの対立関係を導入して、この二つが作り作られる永続的な相互依存の関係、集団として使用する「制度の体系」としての言語(ラング)へとむかう場、ランゲージュ(シンボル化能力の謂)を想定する。

ランゲージュとは前述のように『シンボル化能力ないしは言語活動』であり、記号(シーニョ)をつくり出し使用する能力と、それによって実現される活動を指すとされる。能力と活動には、発声、調音など言語の運用に直接関係するもの、抽象やカテゴリー化といった論理的なものも含まれるのであれば、言語生成に係る人間の観念作用の場とも理解される。

ソシュールは言葉の構造を、コトバを話す人間の活動であるランゲージュ、ラング(言語)、バロール(言語音声)の三層の術語において検討し、やがて後に、シーニョ(記号)を提示している。「セーム」からの用語変更をして「シーニョ」としたのが、1911年5月19日<sup>20</sup>である。

シーニョの提示は「描く、彫る、歌う、身振る、話す、書く」といったシンボル化能力、一切の像化能力(イマージュ)、時間空間的距離を作る抽象化能力についてもカバーする内容を提示しており、「ランゲージュ」は無意識からの指定によって構成される「シーニョ」を作り出し、発語によって言語表現を展開する場と言うべき、言語はランゲージュの活動態であるシーニョの集合、シーニョ相互の差異によって展開する意味の構造体、象徴機能の集合、その網といった理解であろうか。

ソシュールの記号論としての言語論は、「無意識の二項対立」で構成されている言語音声によって、その音声的差異が識別され、カオスから切り取られて始めて意味を成すと言う。このような人間の観念作用の表現と、その受け取られ方のイメージは、人間にとっての対象世界の实在性、厳然たる事実性、そしてそれを知る事ができる近代的理性、知性と言う構図の瓦解とも言えよう。

まさにエピステモロジーというべき、言語学に限らず、他の社会科学の領域においても、構成される概念は、他概念との関係性の中にこそ、その構成を、より顕かにされ得るという事の、予言であるかのようである。

---

<sup>20</sup> 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P194 岩波セミナーブックス2 岩波書店 2009年3月

☆☆☆☆言語の構造について（試案）☆☆☆☆

人間は自らを取り巻く自然、環境に向き合って、さまざまな気づき、驚き、感興のうちに叫びつつ、文化の状態に移行してきた存在としよう。

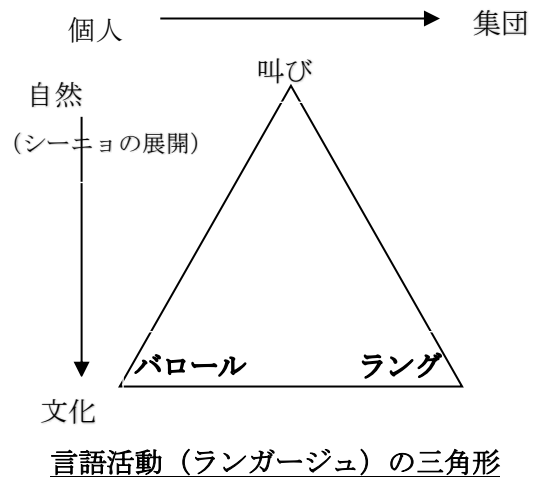
ソシュールは「言語活動の（だがまた、あらゆる象徴体系の）産出において精神の無意識的活動が負う役割を強調する事」によって、「無意識の二項対立」による記号的（非実在的、非拘束的、恣意的、關係的、対立的、否定的）に編み込まれた言語の構造を提示している。人間は、自然の中から、人間が切り取った分だけその意味を成す存在であると言う。

このイメージを、言語音声の中に、見出して提示したのが、音を区別け意味を識別する為の最小の音の単位、「音素」を発見したトルベツコイ、さらにその音素はそれぞれの単語の音を区別して聞きわけ、識別に役立つ対立軸、たとえば無声/有声、母音/非母音、密/疎などの対立関係があり、それを弁別特性（示差的特徴）としての二項対立を考え、この弁別特性（示差的特徴）のセット（群）として言語音声を整理し、ついに世界中の言語を12ビットの弁別特性（示差的特徴）の束であると捉えたのがヤコブソンである。

言語を2ビットの構造図にえがくとすれば、以下の様ではないだろうか。

記号としてのシーニョは、ランゲージュの発現態としての基本構造とみて、シーニョ（共時的な構造）の各言語における織り込まれ方、進展、展開を縦軸にとる。（共時的変換）

横軸は、意味を成す音声（バロール）が、集団における意味の生成過程として、次第にラングが形成されて、各言語（社会制度）として生成流転する様態とする。（通時的変換）



そうすると、共時的にはシーニョの展開であるところの言語は、人の音声言語の発生であるバロールによって、バロールとラングの相互的な関係を通して、通時的な変化をする各言語の生成流転を繰り返して変化をするといった、各民族の言語、人の言語活動の構造を示す事ができると思われる。